

本
文
篇

凡 例

- 一 この本文篇は「水無瀬三吟百韻」と「湯山三吟百韻」の本文を懐紙毎に区切って、各句頭部に整理番号を附し作成したものである。「水無瀬三吟」は長享二年一月二十二日、宗祇・肖柏・宗長の三名で鳥羽院の離宮址たる攝津水影堂に詣でた時、法楽の為に賦した百韻である。また「湯山三吟」は同じくこの三名が攝津有馬温泉にて、延徳三年十月二十日に一座して詠じたものである。
- 二 本文篇作成に際しては、福井久蔵編「水無瀬三吟評釈」(昭23年 喜久屋書店刊)の本文を底本とした。この書は桂湖村蔵本・山岸徳平蔵本・名古屋市立図書館蔵本・続群書類従所収本(松本)等を校合して校定せられた教科用本文である。
- 三 各懐紙(初の表八句・初の裏一四句、二の表一四句・二の裏一四句、三の表一四句・三の裏一四句、名残の表一四句・名残の裏八句)毎に本文を纏め、五・七・五、七・七と分ち書きにして視覚の面で便ならしめた。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|-----------------|----------------|------------------|----------------|-----------------|---------------|-----------------|--------------|-------------------|------------------|--------------------|----------------|----------------|-----------------|-------------------|-------------------|--------------|------------------|--------------|--------------------|-----------|
| 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | | |
| 冬枯れの 芦たつわひて 立てる江に | 三の懐紙の表一四句 | いたゝきけりな 夜なくの霜 | 鐘にわれ たゝあらしの 寝覚して | しめゆふ山は 月のみそすむ | 松虫の なく音かひなき 蓬生に | 身をあき風も 人たのめなり | 逢まてと 思の露の きえかへり | 又生れこぬ 法を聴かはや | この岸を もろこし舟の かきりにて | 月日のすゑや 夢にめくらん | たらちねの 遠からぬ跡に なくさめよ | 身のうき宿も 名残りこそあれ | 草木さへ ふるき都の 恨にて | その俤に 似たるたになし | 君を置きて あかすも誰を 思ふらん | 二の懐紙の裏一四句 | 猶なになれや 人の恋しき | 命のみ 待つことにする きぬくに | 心細しや いつちゆかまし | さりともの この世の道は つきはてゝ | |
| 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | | |
| 72 | 71 | 70 | 69 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | |
| うときも誰か こゝろなるへき | 帰りこは 待ちし思を 人やみむ | 野となる里と 佗ひつゝそすむ | 鶉なく かつ山くれて 寒き日に | うす花すゝき 散らまくも惜し | 露ふかみ 霜さへしほる 秋の袖 | 月はしるやの 旅そかなしき | 誰かこの 暁おきを かさねまし | 三の懐紙の裏一四句 | さひしさならふ 松風の声 | 峯の庵 木の葉の後も すみあかて | 雪にさやけき 四方の遠山 | 朝なきの 空に跡なき 夜の雲 | おさまる浪に 舟いつる見ゆ | 心ある かきりそしるき 世捨人 | 苔のたもとに 月はなれけり | 秋はなと もらぬ岩屋も 時雨るらん | 木のした分る 道の露けさ | 茂みより たえくのこる 花落ちて | くるかた見えぬ 山里の春 | ゆくへなき 霞やいつく はてならん | 夕汐風の 遠つ舟人 |
| 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | 柏 | 長 | 柏 | |

73 昔より たゝあやにくの 恋の道
 74 わすられかたき 世さへうらめし
 75 山かつに なんと春秋の しらるん
 76 植ゑぬ草葉の しけき柴の戸
 77 かたはらに 垣穂のあら田 かへし捨て
 78 ゆく人かすむ 雨の暮れかた
 名残の懐紙表一四句
 79 宿りせん 野を鶯や 厭ふらむ
 80 小夜もしつかに 桜咲くかけ
 81 灯を そむくる花に あけそめて
 82 誰か手枕に 夢は見えけん
 83 契りはや 思ひたえつゝ 年も経ぬ
 84 今のはよはひ 山もたつねし
 85 かくす身を 人はなきにも なしつらむ
 86 さてもうき世に かゝる玉の緒
 87 松の葉を たゝ朝夕の 煙にて
 88 浦わの里は いかにすむらん
 89 秋風の あら磯枕 ふしわひぬ
 90 雁なく山の 月更くる空
 91 小萩原 うつろふ露も 猶やみん
 92 あたの大野を 心なる人
 名残の懐紙の裏八句

柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇

93 忘るなよ かきりやかはる 夢うつゝ
 94 思へはいつを いにしへにせむ
 95 仏たち 隠れては又 いつる世に
 96 枯れし林も 春風そ吹く
 97 山はけさ いく霜夜にか 霞むらん
 98 煙のとかに 見ゆる仮庵
 99 いやしきも 身ををさむるは 有つへし
 100 人におしなべ 道は正しき

宗祇 (六十八歳) 三四句
 肖柏 (四十六歳) 三三句
 宗長 (四十一歳) 三三句

柏 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長

湯山三吟百韻

〔賦何人連歌〕

延徳三年十月二十日

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|---------|---------|---------|--------|---------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|--------|---------|--------|
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | |
| すめは山かつ | 何をかは | 世にこそ道は | ふる里も | 身をなさは | うきはた | 初の懐紙の裏 | かたらふも | 思ひもなれぬ | 露さむし | さよ更けけり | 松虫に | 岩もとす | うす雪に | 初の懐紙の表 |
| 人もたつぬな | 苔のたもとに | あらまほしけれ | 残らすきゆる | はやの | 鳥をうらやむ | 一四句 | はかなの友や | 野への行すゑ | 月も光や | な | さそはれ初めし | 冬やなほみん | 木葉色こぎ | 表八句 |
| | 恨みまし | | 雪をみて | 朝ゆふの春 | 花なれや | | 旅の空 | | かはるらん | 袖の秋風 | 宿いて | | 山路かな | |
| 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 宗祇 | 宗長 | 肖柏 | |
| 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 |
| 藤衣 | 涙をたにも | 枕さへ | もの思ふ玉や | 螢飛ふ | いつみを聞けは | わきてその | 入りにし山よ | すみはなれ | さそふつてまつ | たかならぬ | 思の露を | 秋のよも | あはれは月に | 名も知らぬ |
| なこり多くも | なくさめにせん | しるとはしるな | ねんかたもなき | 空によふかく | た秋のこゑ | 色やは見ゆる | 何かさひしき | 今はほとさへ | 侘人そうき | あたのたのみを | かけし悔しさ | かたる枕に | なほそそひ行く | 草木のもとに |
| 今日ぬきて | | 我心 | | 端居して | | 松の風 | | 雲みちに | 命にて | | | あけやせん | 跡しめて | |
| 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 | 長 | 柏 | 祇 |

30 いてんも悲し 秋の山てら
 31 鹿の音を あとなる嶺の 夕まくれ
 32 野分せし日の 霧のあはれさ
 33 静なる 鐘に月まつ 里みえて
 34 行きて心を みたさんも憂し
 35 我ならて 通ふや人も しのふらん
 36 ふるき都の いにしへの道
 二の懐紙の裏一四句
 37 咲く花も おもはさらめや 春の夢
 38 さくらといへは 山風そ吹く
 39 朝露も なほ長閑にて かすむ野に
 40 うちなかむるも あちきなの世や
 41 更くるまで 身のうき月を 忌かねて
 42 今よりいとふ なかきよの闇
 43 いさり火を 見るもすさまじ 沖つ舟
 44 夕の波の あら磯のこゑ
 45 郭公 なんのりそれとも 誰分かむ
 46 かへらん旅を 人よ忘るな
 47 ありぬやと 心みにすむ 山里に
 48 ならはゝしほれ あらしもそうき
 49 つれなしや 野は霜かれの 思艸
 50 いつか心の 松もしられし

長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇

70 今朝や身にしむ 天の川風
 69 うちつけの 秋にさひしく 霧立て
 68 み山にのこる うくひすの声
 67 春そ行く 心もえやは とめさらん
 66 藤咲く頃の たそかれの空
 65 花をのみ 思へはかすむ 月のもと
 三の懐紙の裏一四句
 64 うらみかたしよ 松風の声
 63 袖さえて よるは時雨の 朝戸出に
 62 雪ふむ駒の あし引の山
 61 こえしとの 法もくるしき 道にして
 60 おいてや人は 身をやすくせん
 59 たのむこと あれは猶うき 世間に
 58 あやにくなれや 思たえはや
 57 ねぬ夜半の 心も知らず 月すみて
 56 虫の音細し 霜をまつ頃
 55 露もはや 置きわふる庭の 秋の暮
 54 木の下もみち 尋ぬるもなし
 53 捨てらるゝ 片破れ小舟 朽ちやらて
 52 みちくる汐や 人したふらん
 51 和歌の浦や 磯かくれつゝ 迷ふ身に
 三の懐紙の表一四句

柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇

71 衣うつ 宿をかりふし おきわかれ

72 夢はあとなき 野辺の露けさ

73 かけ白き 月を枕の むらすゝき

74 いつしか人に なれつゝも見む

75 をちこちに 成りて浅間の 夕煙

76 きゆとも雲を それとしらめや

77 はかなしや にしを心の 柴の庵

78 身のふりぬまは 何おもひけん

名残の懐紙の表一四句

79 みるめにも みゝにもすさひ 遠さかり

80 冬の林に 水こぼるこゑ

81 夕からす ねにゆく山は 雪晴れて

82 いらかの上の 月のさむけさ

83 たれとなく かねに音して 深る夜に

84 ふる人めきて うちそしはふく

85 蓬生や とふをたよりに 唧つらん

86 この頃しけさ まさる道芝

87 あつき日は かけよわる露の 秋風に

88 衣手うすし ひくらしの声

89 色かはる 山のしら雲 打なひき

90 尾上の松も 心みせけり

91 憑めなほ 契りし人を 草の庵

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

92 うときは何の ゆかしけもある

名残の懐紙の裏八句

93 わりなしや 勿来関の 前わたり

94 誰れ呼子鳥 啼きて過くらむ

95 思ひ立つ 雲路にかすむ 天つかり

96 さこそは花を あとの山こえ

97 心をも そめにし物を 世捨人

98 出はかりなる やとりともなし

99 露のまもうき 古里と思ふなよ

100 一村雨に 月そいさよふ

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

肖柏 (四十九歳) 三四句

宗祇 (七十一歳) 三三句

宗長 (四十四歳) 三三句